

〔研究ノート〕

ウィネマッカ

『パイユート族の中で生きる——虐待と主張——』

——ある先住民女性の生涯——

西村 頼 男

キーワード

合衆国先住民、北西部、パイユート族

目次

I 略伝

II 『パイユート族の中で生きる——虐待と主張——』

III 評価

I 略伝

わずかに四七年間で「有史以前」とされる時代から十九世紀にまで一気に辿りつき、五〇歳に満たない人生を生き抜いたセアラ・ウィネマッカ（一八四四—九一）の生涯はまさに疾風のごとくであった。先住民は白人の到来によって激変する生涯を送ることを余儀なくされたが、その激変の過程を詳しく記した書物は多くな

い。絵文字を例外として、先住民諸部族が文字をもたなかったことが、白人と比較したとき不利であったとはいえる。しかしながら、文字をもった白人が道徳的・倫理的に優れていたとはいえない。そのことこそ、ウィネマッカが自ら体験し、かつ、『パイユート族の中で生きる——虐待と主張——』¹⁾（一八八三）に記したことである。

彼女の生涯は帝国拡大中の合衆国政府と強欲な入植者たちとの闘いであった。と同時に、女として自由奔放に幾度も恋に身を投じ、結婚と離婚を繰り返した人生でもあった。先住民女性で彼女ほどに私的にも公的にも活躍・活動した女性には稀有である。

彼女が生まれたのはおそらく一八四四年であり、生誕地は現在のネバダ州西部に位置するハンボルト川の湿地帯であった。時代と場所と家族が彼女の人生を規定したが、まず、一八四四年という時代はゴールド・ラッシュが目前に迫っていたことになる。また、生誕地がカリフォルニアに近いことは、白人入植者が間も

なくパイユートの地にやってくることを意味した。さらに、先住民社会で家族の絆が強いことは自然なことであるが、彼女がウィネマッカという北部パイユート族の族長の家系に属したことも、彼女が活動家となった大きな要因である。

彼女は白人の文明を受け入れる祖父（トラッキ）の影響を幼時より強く受け、白人社会と積極的に接触することを教えられた。一八四四年の晩秋、ステイヴンズ隊が山岳地帯に入ってきたが、このステイヴンズ隊は初めて荷馬車で山岳地帯を越えた一隊であった。トラッキはその道案内役をつとめて、彼が求めていた白人との関係を一八四〇年代に確立していった。彼が傲慢にしたものは、ジョン・チャールズ・フレモント^②が西海岸への道を求めて第二次探検を行なったとき、その道案内をしたことであつた。その際、フレモントはトラッキの協力に感謝して一片の紙切れ（一種の「旅券」）を渡した。それには「これを読んだ者はこの人物（トラッキ）を厚遇するように」と記してあつた。トラッキはこの「旅券」を大切に身につけて、カリフォルニアに行くときにも役立てた。^③

その一方で、ゴールド・ラッシュ直前の四六年から四七年にかけての厳冬の山中で、白人同士が人肉を食べる事件もあつた。そのため、「白人は人間ではない」という恐怖心がパイユートたちの中に広がった（十四ページ）。

やがて、成長したセアラ・ウィネマッカは生き延びる術として英語は役に立つという理由で、五七年にカーソン溪谷にやってきたウィリアム・オームズビー少佐の家に預けられて、彼女は家事と交換に英語を教えてもらった。オームズビー家を去った彼女は五八年から五九年の冬に父親と一緒にサンホアキンへ行き、そこ

で、地獄の恐ろしさを説くキリスト教の説教を聞いた。カルフォルニアが五〇年に州に昇格して以後、白人の姿はますます現在のアイダホ州、オレゴン州、ネバダ州などの地にしばしば見られるようになり、先住民と白人の衝突は時間の問題となつた。六〇年一月に、「二八六〇年戦争」と呼ばれるパイユートと白人の戦いが起こり、その夏、七五〇人の兵士がカリフォルニアから派遣された。同年十月、トラッキが亡くなった。

彼女は六四年十月にサンフランシスコのメトロポリタン劇場で、インディアン担当官（ジェームズ・ミラー）^④が計画した「ワイルド・ウェスト・ショー」に似たショーに出演したが、計画は失敗であつた。六五年三月にはウエルズ指揮官がマッド湖近くにいたパイユートたちを虐殺した。^⑤この虐殺事件後、彼女の父親（オールド・ウィネマッカ）は北のオレゴンにあるステイーンズ山に入つてしまった。六八年七月、クルック將軍はパイユートの族長たちと会談して、パイユートが保留地の外に出ることを許可した。ただし、彼らが軍隊に敵対しているバノック・インディアンに合流しないという条件つきであつた。会談の後、彼女の説得が功を奏して、キャンプ・スミス（オレゴン）にいたパイユートの一群がキャンプ・マクダーミットに移った。軍がオレゴンにおける牧畜業者の台頭を考慮して、キャンプ・スミスを閉鎖すると決定したためであつた。（キャンプ・マクダーミットはオレゴン、アイダホの両州がともにネバダ州に接する地点近くで、ネバダ側にあつた。）六九年十二月頃、彼女はこの軍事基地で有給の通訳になつたと思われる。半年後の七〇年四月四日に彼女はパイユートの窮状を訴えた、最初の手紙をダグラス少佐に送った。七一年には通訳職を解任されて、病院で働くようになった。七二年一月には

エドワード・バートレット中尉と結婚するが、結婚期間は一カ月以下であった。七四年に、カナダ系のチャールズ・B・ハミルトンと一緒にあったが、この年の十二月に父親オールド・ウィネマッカが会議を召集したために、彼女はソルト・レーク市から戻った。七五年十一月、インディアン担当官（サミュエル・B・パリッシュ）の通訳となり、七六年九月、正式にバートレットと離婚して、元の名前に戻った。七七年十一月、パイユートの窮状を訴える連続講演会をサンフランシスコで開始して、約一カ月間続けた。七八年には、弟のナッツズが族長の地位をおりた。この年の六月、パイユートと親族関係にあるバノック族が白人の圧迫をはねのけるために立ちあがり、「バノック戦争」が起こった。

バノック族はパイユート族と親戚関係にあった。しかしながら、両者の溝を深かめたのは白人の侵入であった。オールド・ウィネマッカとセアラが指導しているパイユートはトラッキの基本方針を踏襲していた。すなわち、白人との協調をどうにか守ろうとして、インディアン担当官の虐待にも耐えた。しかしながら、バノック族は一八七八年に白人の圧迫を跳ね返すために立ちあがった。その原因は、アイダホにあったフォート・ホール保留地のインディアン担当官がバノックに十分な支給品を与えなかったことにあった。その一方で、幾世紀にもわたって、バノックはカマス草原地帯でヒナユリ（利尻草）をとって生活していた。ところが、白人はフォート・ブリジャー条約を一方的に破棄して、ブタの大群を持ち込んで、彼らの生活環境を破壊した。こうした事情がバノック戦争の背景にあったことをクルック將軍も認めた。⁷⁾

七九年二月、パイユートはヤキマ保留地に移され、同年六月、彼女は同地でシヨショニ族（シープ・イーターズ）の子供たち

のために学校を開設した。八〇年夏、彼女はバンクーバーに旅行でやってきたヘイズ大統領にパイユートの窮状を救って欲しいと嘆願したが、無駄であった。彼女の最後の結婚は八一年一月であり、相手は七歳年下のホプキンズであった。八三年から八四年夏にかけて東部で三〇〇回以上の講演を行なったが、講演地はボストン、ニューヨーク、ペンシルベニア、ボルチモアなどであった。八三年に、『パイユート族の中で生きる——虐待と主張——』がニューヨークで出版された。同年十月五日、ドーズ上院議員の家に招待され、八四年四月二日には、議会小委員会で証言した。八六年夏には、パイユートの子供のための学校を建設し、八七年十月一八年には、ホプキンズが亡くなった。八九年三月、ゴースト・ダンス教の影響で生徒はいなくなつて、同年夏、学校は閉鎖された。九一年春、彼女はヘンリー湖に戻り、同年十月十六日、亡くなった。

Ⅱ『パイユート族の中で生きる——虐待と主張——』

この書物はセアラ・ウィネマッカが一八八三年から八四年夏にかけて東部で行なった講演を、ある白人女性が編集したものである。その女性の名前はメアリ・タイラー・マンという。マンは合衆国における幼児教育の先駆者として著名なホレス・マンの夫人であり、エリザベス・パーマー・ピーボデー^⑩と姉妹であった。ピーボデーはボストンにおける最初の女性出版者とされる。したがって、この書物は東部に住む二人の白人女性の協力のもとに編集・出版されたものである。

この書物は著者の生誕時前後の時代から一八八三年までのこと

を記しており、内容としては自伝でもあり、パイユート族の歴史でもある。全体を三部に分けると、第一部は第一章に対応しており、家族のことを扱っている。また、一八四四年以後、白人が移住することで起きた事件が記されている。第二部は第二章に対応しており、パイユート族の歴史・習慣・社会などが記されている。第三部はそれ以後の章であり、パイユートと白人の衝突を扱った、きわめて同時代的な記録である。

第一部（すなわち、第一章）は「パイユートと白人の最初の出会い」という章題がついており、書物全体の約六分の一を占める。野営していた著者の祖父トラッキがカリフォルニアからやってきた白人の一団を見ると、「白人の兄弟よ——われわれが待っていた白い兄弟がついにやってきた」と言って白人を歓迎した。しかしながら、白人はトラッキを信用しなかった。トラッキは、白人はまたやってくるだろうと部族の者に言つて、次のように語った。世界の初めには二人の女の子と二人の男の子がいた。一組の女の子と男の子は色が肌黒く、もう一組は白かった。しばらく二組は友好的だったが、間もなく二組は喧嘩を始めた、という話であった（六―七ページ）。トラッキの言った通り、年を経るにつれて多くの白人がやってきたために、ウィネマッカ一家は分裂した。トラッキは白人の文明をすぐに受容しようとするが、彼の息子（オールド・ウィネマッカ著者の父親）は人々に山に入るようにと告げる（十二ページ）。トラッキが白人の文明を受容する契機はいくつもあるが、そのひとつはカリフォルニアで目にした新聞である。彼はつぎのように述べる。「彼ら（白人）がこんな驚嘆すべきことをなしうるのなら、彼らは人ではなく、まぎれもない精霊だ」（十九ページ）と賞賛する。白人はハンボルト川に

毒を入れたという噂も流れ、実際多くのパイユートが死ぬ。白人に対する態度はトラッキと彼以外の者とは正反対であることが、繰り返し読者に語られる。

第二部（すなわち、第二章）には「家庭内および社会の道徳」という章題がついている。当然、他の先住民諸部族の習慣や道徳と共通するものは多いが、本書の特徴としては、女性の視点から語られていることである。女の子は花の名前にあやかつて命名される。女性が結婚の対象となる年齢に達すると、公にされる。結婚相手を決めるのは女性本人の意志である。結婚後、新郎と新婦は古い衣類を総て他者に与えて、本人たちは新しい衣類をまとう。第一子の誕生時には、夫は二五日間、家事を勤める。族長のテントはいちばん大きい、それは人々が集まって話しあうためである。族長はその際、人々を供応しなければならないから、族長はいつも貧しい。

第三部（第三章から第八章まで）ではパイユートと白人の衝突、インディアン担当官と保留地制度の実態などが描かれており、読者はその中に著者の活躍を読み取ることができる。以下において、ウィネマッカの文明化政策批判、軍隊との関係、教育者としての側面などを検討する。最初に、彼女が一八七〇年にダグラス少佐に宛てて書いた、パイユートの窮状について述べた手紙の全文を引用する。

合衆国陸軍 H・ダグラス少佐へ

拝啓

この駐屯部隊の部隊長から、あなたさまが、可能ならば、インディアンをトラッキ川保留地に送ることで、その境遇を改善でき

ることを期待されて、この周辺に住むインディアンに関する完全な消息を求めておられると、聞いております。ここからカーソン市にいたる間に住んでいるインディアンは総てパイユート族に属します。私の父——名前はウィネマッカと申します——は全部族の主席族長ですが、今や、高齢のために、彼らを従わせたり、あるいは、彼らの心に保留地に送られる必然性を教え込むだけの指導力がありません。実際のところ、父はそれに反対しているのだと思います。父、私自身、そして、ハンボルト川インディアンとクーインズ川インディアンの大多数はかつてはトラッキ保留地にいました。しかしながら、もし私たちがあそこに留まっていたならば、餓死するだけになっていたことでしょう。もし、人々が本来受ける資格のあるものを担当官から受け取っていたならば、人々はあそこを立ち去らなかつたことでしょう。農業に関する人々の知識について述べれば、人々は全く無知ですが、それは人々に学ぶ機会が全くなかつたからです。しかしながら、労力が適切にかけられたならば、人々は自分自身の労力によって自活するように喜んで努めるであろうと思います。生産物が自分のものとなり、自分が利用でき、自分を満足させるものとなると信じることができるようになったらという条件つきですが。私たちが保留地にいたとき、どのように扱われたかについて私が事細かに述べる必要はありません。私たちは保留地に閉じ込められて、川で捕れるだけの魚で生きなければならなかつたと述べれば十分です。もしも、これが保留地で私たちを待っている文明化というものならば、山で生き、私たちの生来の流儀で長く生きる方がはるかに望ましいですから、私たちが保留地に入ることを強要されなくてすむように神が許されますように。暮らしに関する限りは、いず

れであろうと駐屯地にいるインディアンは十分な食料と、廃棄された衣類を得ることができません。

しかしながら、これはいつまで続くのですか。インディアンに関する政府の目標は何ですか。私たちがおとなしくしていることで十分ですか。総てのインディアンを駐屯地から移して、トラツキ川保留地やウオーカー川保留地のような保留地に入れなさい。そうすれば、現在インディアンを服従させておくために必要な以上に、インディアンを境界内に拘留しておくために多くの駐留兵力が必要になることでしょう。その一方で、インディアンが土着の地で恒久的な定住地を確保できると保証されるならば、さらに、私たちの白人の隣人が私たちの権利を侵略することがなければ、納得のゆく分け前の土地が私たちのものとして割り当てられ、必要な学習する便宜が与えられるならば、未開人は今から十五年から二〇年後には社会の慎ましくて遵法精神にとんだ構成員になると、私は保証します。

貴下、いつの日か、ここに住むインディアンに関する消息を必要とされるならば、私がそれを提供できれば嬉しく存じます。

一八七〇年四月四日 ネバダ・キャンプ・マクダーミットにて

セアラ・ウィネマッカ⁽¹⁾

これは彼女が二六歳で書いた手紙である。彼女がウィリアム・オームズビー少佐の家で英語を習い始めた年齢を考慮に入れると、この手紙に現れる英語の表現方法も修辭も優れている。

さらに、この手紙は、彼女が将来、指導者として活躍することを予想させるに十分な内容を含んでいる。白人との共存を望むと

いう基本姿勢を示しながら、パイユートをめぐる現状に言及し、かつ、将来に対する展望も述べている。彼女はまた、論法も心得ている。この手紙に記されていることが決して彼女独りのものではないことを示すために、父親に言及する。オールド・ウィネマッカは、実際は全パイユート族の長ではなかったが、彼女は父親の権威を借りる。はるか東部にいる白人がパイユートの実情を知るよしもないから、彼女の主張が反駁される恐れはなかった。

彼女は手紙の中心部で、現実に保留地で行なわれていることが、担当官による搾取であると指摘する。その具体例として、農作物の搾取があげられる。横暴なのは担当官だけではなく、入植者の白人たちはパイユートの権利を侵害して憚らない。結論として、保留地制度そのものに對する批判とならざるをえない。また、白人の主張する「文明化」の内容に疑問を提起することにもなるが、彼女は手紙の締め括り方を心得ている。パイユートの文明化は可能だと断言するが、その少し前で、軍隊に言及する。駐屯地にいるパイユートにとって、軍隊は生存を保証してくれる場であると、軍人を賞賛する。軍人の公正さに寄せる彼女の期待が大きいことは著書の中で繰り返し見られる。

ここに引用した少佐宛ての手紙は後年、ヘレン・ハント・ジャクソンの『恥ずべき一世紀』（一八八二）に収録された。ジャクソンは詩人エミリー・ディキンソンの友人として有名であり、この書物は合衆国におけるインディアン政策に影響を与えた画期的な書物であるから、ウィネマッカは歴史の中にしつかりと名前を刻んだことになる。

〈告発〉

一八六九年、グラント大統領は「クエーカー政策」と称される政策を採用し始めた。これは、インディアン担当官をキリスト教諸派から推薦された候補者一覽表から選ぶというものであった。グラントが最初に頼りにした教派にちなんで「クエーカー政策」という名前で知られるようになった。しかしながら実際には、遠隔の地で、わずかばかりの報酬を受けて奉仕してくれる有能で廉直な担当官を補充することは困難であった。保留地に任命される人間が一度もインディアンを見たことがなかったり、その文化について全く無知であることも珍しくなかった。また、畑を耕したことのない農業指導員、字の書けない事務官、他の学校では勤まらない無能な教師が任命されることもあった。¹²⁾

ウィネマッカはこの書物で、保留地制度が役人の蓄財のために存在していることを具体的に示している。まず、文明化政策の中で大きな役割を担うことになっている農業指導員について、彼女は次のように指摘している。あるインディアン担当官（マックマスターズ）はワシントンへ送る分として収穫物の五分の一を取り上げるが、収穫量がすくなくとも取り上げる（八七ページ）。また、マッシュラッシュという農業指導員は農作業を教えてくれないばかりか（八八ページ）、さらに、種子の代金はパイユートが支払わねばならない。

教育に関していえば、インディアン担当官（スペンサー）は自分の娘を教師に指名して、月額五〇ドルを与える。また、インディアン担当官は白人の牧畜業者から家畜一頭につき、一ドルを受け取って、財産を築く（八六ページ）。したがって、業者がインディアンの土地に侵入しても担当官が取り締まらないのは当然である。こうして連邦政府が支給する公金が私物化されるのは稀有

なことではない（八六ページ）。

担当官は文明化政策を推進する役割を担わないばかりか、不法行為を行なう。一八六八年の春、ピラミッド保留地の担当官（ヒュー・ニュージエント）がある先住民に火薬を販売した。火器の使用はすでに普及していたが、先住民に対する火薬の販売は違法であり、先住民の火薬所持も違法であった。そのために、この先住民は不法所持犯で担当官の部下に殺害された。その先住民の兄弟は報復として白人に負傷を負わせた（七九―八〇ページ）。

また、担当官事務所に派遣されている医師は配給の多量のアルコールをほとんど飲んでしまっている。そのアルコールは先住民を治療するために支給されたものであったにもかかわらず、医師はそれを横領する（一三〇ページ）。

〈軍隊賛美〉

彼女の軍隊に寄せる信頼と親密さは先に引用したダグラス少佐宛ての手紙にも現れている通りであるが、これも祖父トラッキから引き継がれたものである。トラッキがフレモントからもらった一片の紙を「旅券」として役立てたように、ウィネマッカも軍人を自分の頼みとした。彼女は、「軍隊に行つて報告する」という趣旨のことを述べて、インディアン担当官の不正から自分と部族を守ることを忘れなかった。

一八六五年のマッド湖虐殺事件の後、翌六六年に軍はジョージ・クルック將軍をパイユートを抑えるために派遣した。クルックは経験によつて、保留地制度は先住民の本性になつていないという理由で、先住民を保留地に閉じ込めることに賛成しなかった。そこでクルックは、パイユートが平和的であることを条件に、

遊牧生活を認めた。その結果、パイユートたちはキャンプ・マクダーミットで自由に生活し、兵士のために働いた。支給品ももらった。ウィネマッカが軍隊と軍人に対して好意を抱くことになつたのも当然である。

〈教育〉

一八六〇年春、ウィネマッカは祖父トラッキの意向にそつて、カリフォルニア州サンノゼの学校に妹とともに学校に入学した。学校は女子修道会の学校であつた。しかしながら、白人の金持ちたちは、自分の子供が先住民の子供と一緒に学ぶことに反対した。そのために二人は間もなく退学した。

彼女はこのような自分の体験から、先住民の子供を対象とした学校を開設する必要性を感じていたが、彼女の教育者としての適正を評価した同時代の証言がある。先に手紙を引用したヘンリー・ダグラス少佐はネヴァダ州におけるインディアン対策局長として、キャンプ・マクダーミットに先住民のための学校を開設することを建議した。その建議書の中で、彼は、彼女の「インディアン」の言語に関する知識と人格」が彼女を「貴重な女教師」にするだろうと述べた。¹³⁾

彼女の教育への情熱は部族を超えるものであつた。一八七九年、連邦政府の方針でパイユートがヤキマ保留地に住むようになると、彼女はそこにいたシヨシヨ二族の十八名の子供に英語を教え始めた。これは彼女のシヨシヨ二語を理解する能力を証明するが、同時に、これは彼女が、部族を超える活動の必要性を認識していた証明でもある。

Ⅲ 評価

『パイユート族の中で生きる——虐待と主張——』を編集したメアリー・タイラー・マンによれば、これは先住民のことを文学作品として書いた最初の書物である。そして、マンはウィネマッカが女性であることに重要性を認めている（二ページ）。

本書出版の意義は、同時代のアメリカ社会にパイユートのおかれています現状を知らせ、かつ、「クエーカー政策」の実態を示したことに求められる。二十世紀に入って実行される同化政策の修正を迫った先駆的な書物でもある。

先住民社会では個人と部族社会は相即不離の関係にあるが、著者は本書においてそのことを十分に描いた。さらに、読者は明確に、女性の視点を十分に感じる。ネバダ大学出版部が本書を一九九四年に復刊した意義は自明である。ネブラスカ大学出版部が一九九〇年に『モーニングドロー——セーリッシュの自伝』を出版したことに共に、先住民文学研究に寄与する復刊である。

本書の第三章はパイユート族の民族誌として貴重な記録であるが、ウィネマッカは民族誌の記録者であることに満足しなかった。彼女は農業や英語教育の価値を認めるがゆえに、インディアン担当官、農業指導員、医師、宣教師たちの腐敗を激しく追及する。それとは対照的に軍人を信頼する。

一九世紀後半に先住民として彼女ほどに活躍した女性は他にいない。しかしながら、今日、彼女に対する評価は一定せず、評価は大きく分かれる。良いほうの評価は、彼女は西部の歴史において尊敬に値する、自己の利害を度外視して行動した、精神的な女

性という評価である。彼女は政府から独立した学校を建設し、先住民の主張を通すために尽力したことが評価される。その一方で、彼女は父親（オルド・ウィネマッカ）を称賛することで、自分を誇示しようとしたという批判がある。また、彼女は軍部の手先であった、さらには、部族の裏切り者であったという批判がある。北部パイユート族においても、彼女に対する評価は一定してないとされる⁽¹⁾。

注

(1) Sara Winnemucca Hopkins, *Life Among the Putes: Their Wrongs and Claims* (Reno: University of Nevada Press, 1994). 以下、本文中における引用は総てこの書物による。ページ数のみを記す。

(2) ジョージア州生れの軍人、探検家。一八一三—九〇。第一次探検ではキット・カーソンの援助をえて、オレゴンへの最善の道を確認した。第二次探検ではソルトレークを探検して、カーソン峠を経てシエラ・ネバダを越えた。第三次探検ではロッキーマウンテンを越えて、パイユートの地であるウォーカー湖に到達した。彼の西部旅行記は多くの人に読まれた。

(3) Sally Janjani, *Sarah Winnemucca* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2001) pp.23-4.

(4) ワイルド・ウエスト・ショー（大西部ショー）。合衆国西部開拓時代を再現した大がかりな見世物。特にバッファロー・ビルズ・ワイルド・ウエスト・ショー（二八八三—一九一六？）が有名である。バッファロー・ビルはポニーエクスプレス（一八六〇—六二）の御者として有名であった。ポニーエクスプレスはミズーリ州セント・ジョゼフからカリフォルニア州サクラメントまで一九六〇マイルを走った早馬便。ビル自身は一八七六年にバッファロー・ビルズ・ワイルド・ウエスト・ショーを組織して合衆国とヨーロッパ

ツパ各地を巡業した。

(5) Zanjani, *Sarah Winnemucca*, p.76.

(6) オハイオ州生れの軍人。一八二九—九〇。陸軍士官学校を卒業後、カリフォルニア州に行った。一八五三年、フォート・フンボルトを建設する遠征隊の一員となった。白人がシャスタ・インディアンに対して加える虐待を歎いた。

(7) Zanjani, *Sarah Winnemucca*, pp.47-8.

(8) ゴースト・ダンス教にはふたつあるが、いずれもパイユート族にその起源を辿りうる。最初のはウオジウォブが一八六九年に始めたものであり、オレゴンと北部カリフォルニアに広まったが、間もなく収まった。第二の運動は、パイユート族のウオーヴオーカ(またの名はジャック・ウィルソン 一八五八—一九三二)が一八八九年に始めたものである。これは、なくなった土地が戻り、亡くなった先祖が戻り、なくなりつつある食糧源が再び戻り、インディアン社会が甦ることを願ったものであった。その教えはシャイアン、アラパホ、スー、カイオワ、カドー、およびパイユートの各部族の間に広まった。ウオーヴオーカは亡くなる時まで影響力をもち、ポーニー族の一部は二〇世紀初頭までゴースト・ダンス教を実践していた。また、一九六〇年代まで彼の教えを信じる者もいた。

(9) 一七九六—一八五九。

(10) 一八〇四—九四。

(11) Helen Hunt Jackson, *A Century of Dishonor: A Sketch of the United States Government's Dealings with Some of the Indian Tribes* (Norman: University of Oklahoma Press, 1994), pp.395-96.

(12) William T. Hagan, *American Indians* (Third edition). Chicago : The University of Chicago Press (1992), p.122.

(13) Zanjani, *Sarah Winnemucca*, p.124.

(14) Zanjani, *Sarah Winnemucca*, pp.304-05.